

浄土

1989-2

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授受承認雑誌) 第三五号
平成元年一月二十五日印刷 平成元年二月一日発行
第五十五卷 二月号



待春





二月の秀句

一掬の水のとろりと二月の墓

久保 まさじ

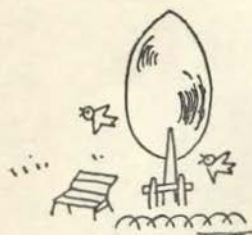
涅槃像米寿の父の面影に

矢野 絢

盆梅の咲きそむ室に朝日満つ

伊藤 智代

二月号



極楽国土には、衆生、生ずる者は、
皆これ阿鞞跋致なり。

——『阿彌陀經』

目 次

<ずいそう…「つくづく法師抄」>

涅槃を想う……………眞 野 孝 信……(2)

——生死輪廻の断絶——

《涅槃会法話》

怠たらず精進せよ……………成 田 光 俊……(9)

心の積極的転換……………原 口 正 弘……(15)

《特別寄稿》

「須弥山の世界」補足……………後 藤 真 康……(21)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <23>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(30)

——我が思い出に住む犬たち(9)——

寄 稿

乗り越え難きもの……………吉 田 勇之助……(28)

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(2)

……………松 浦 行 真……(37)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

◇◇ずいそう……「つくづく法師抄」◇◇

涅槃を想う

—生死輪廻の断絶—



眞野孝信

(八幡市正法寺住職)

二月、陰曆に謂う如月は、又は衣更着の字の当てられるように、着物を更に重ね着をする寒さ厳しい季節の訪れであるが、仏教徒にとっては、十五日は、厳肅に法会を営む積尊入涅槃の仏日である。

涅槃は、梵語 Nirvāṇa の音訳で、泥洹（宇

宙に通じて不変常住の体）とも訳されて、それは、生死の大苦を滅し尽して、煩惱の流れを度脱超越した滅度・寂滅の意味で、煩惱の火が吹き消された不生不滅の境地とされている。

涅槃については、『涅槃経』の中の「諸行無常偈」が解り易い説示だと想われる。

諸行無常（万象悉く変移して常態なし）……

色は匂へど散りぬるを、

是生滅法（是れは余儀なき生滅の理法なり）……

わが世たれぞ常ならむ、

生滅々已（生滅が滅し已れば）……

有為（まよひ）の奥山けふ越えて、

寂滅為楽（寂滅は衆と為る）……

浅き夢みじ酔ひもせず。

（いろは歌）

の法理から、前説した「煩惱の火が吹き消された不生不滅の境地」とは、喻えばローソクの火を消したとしても、火として燃えていた現象のローソクの本体は気化したので、「無」になったのではない、と理解すれば首肯できる。

涅槃は、有余（依）涅槃と無余（依）涅槃とに分けて説かれている。余とは肉体のことである。

有余涅槃とは、今生の果報たる肉体をとどめながらも、三毒の根本煩惱（貪、瞋、痴）を中心とした一切の煩惱を断ち、未来生死の因を絶つことを成し得た境地である。

釈尊八十年の御生涯を通して、仏教徒をして最も感動誘引するもの、それは、伽耶山上菩提樹下の開悟（おさと）である。成道即ち十二月八日暁天に明星の光輝するころ、草を敷いて結跏趺坐（左右の足背を交結して左右の腿上に置く。仏の坐法）の釈尊は、熾烈に起伏する煩惱の衆魔の悉くが、急転して偈伏（おそれつつしんで、ひれふす）。（註）詳細は「因果経」悪魔降伏説参照。その刹那から三十五歳の太子悉達多は大聖仏陀世尊として、成道会の宣疏に「……端然として動なき御姿、莞爾（にこやかな微笑）として万衆を見そなはす御誓。……ああ何ものか比し奉るべき、実に是れ世間無与等（ともに等しきものなし）無比不思議にして、唯但

敬礼し奉るある而已。……

伏して惟るに、如来は常住にして変易あることなし、菩提樹下の正覚（おさとり）、豈それ初の成道ならんや……」と。

金剛宝座における成等正覚の釈迦牟尼如来、成仏得道こそを有余涅槃の如来として仰ぐ所以である。爾後の釈尊は得涅槃の如来である。

無余涅槃は、心身の全てを滅し、生死輪廻の所依（もとを為すもの）を宗絶して、一切の煩惱を離れ（寂）、一切の苦患を離れる（静）の境地に入ること、涅槃会の表白に「北首の嚴儀を懐い（頭北面西横臥された入涅槃の嚴肅なお姿を懐いめぐらせて）、薦羞の礼を展べ（供物をそなえ、礼をあつくし）、少に哀歎の誠を陳ず（到底尽くし得ないかなしみなげきの真心を申し述べる）」として、沙羅林中に入涅槃の釈迦牟尼如来を拜むのである。

斯くして、涅槃の真実を通し、成道と涅槃

は一貫して、不生不滅の法理を証悟し給える大聖釈迦牟尼世等の、身業説法であつて、永久の生命、不死常住のみ仏を拜むのである。

上來、何れにしても、筆舌に尽し得ない涅槃の真意を、浅学を悔みつつ、印度仏教史や故宇井伯寿先生に受講した『仏陀論』を回想しながら、仏陀信仰の誠心をもって略述したが、印度の仏蹟を巡拝して、諸学説を主軸にと申すよりは寧ろ杖として、仏縁に恵まれた凡僧一期の有難い信仰の旅路であつた。

旅程の都合上、昭和五十三年一月二十八日から二月十四日までの十八日間ではあつたが、大本山百万遍知恩寺法主、林靈法先生を御先達とする一行は、僧俗共に伝道袈裟と念珠、特に僧侶は香衣・五条・莊嚴珠数・中啓を携帯して、ガヤの日本寺における記念法要に備えた。インド、ネパール、タイの各地仏蹟、特に、吾等が本師にして、娑婆世界において

迷える衆生を勧めて、念仏の声とともに弥陀の浄土に往生せしめる教法の主（発遣教主）、仏陀世尊御法縁の五大聖地では、洋法衣を着してお勤めをさせていただいたが、つくづく身にしみて、法悦に満たされた勸喜は、応身仏（衆生済度の為に人間界に誕生し給える応化の仏）が足跡を印された大地の現場を訪れて、拝跪（拜みひざまづいて）合掌して念仏するとき、念仏御唱和の仏陀が今ここに在します想いが確かな実感として胸奥にいただけた事である。

大雪山ヒマラヤの霊峰を北に仰ぎ、この山脈に源を発し、幾多の支流を合せて、その広さ約八万平方キロと云われるヒンドスタンの大平原を東南に流れ、ベンガル湾に注ぐ長さ二七〇〇キロの長流恒河、それはまた、ヒンズー教徒の崇拜する聖なる大河ガンジスが、大動脈的な使命を果す大自然の大地、無常に生きる人間、そこに天地宇宙の六生命に統攝

（統合摂取）される人間一期の生を沈思せずにはおれぬ必然性の素地が、時間的（歴）にも空間的（横）にも、その際限を超越した「南無仏」への開悟に、宇宙觀に根ざす人生觀の体現者仏陀の出現をみるに至ったと想えば、仏、菩薩が人間生活の実体に即応して現れたとする偉聖釈尊の応現は、吾が国では到底その憶測すら及びもつかない宏大無辺（その広さはてしない）なインドなればこそ、と、仏生地としての感慨一入のものがある。

ここでは、仏蹟巡拝の旅日記を誌す意図はないが、本来は釈尊の御生涯を通じて、その足跡と背景を悉に探究すべきものであるが、せめてもの、五大聖地の遺跡に直参して、回想思念したことがらを略述させていただきたい。

誕生の聖地にて 釈尊の誕生地ルンビニーは、インドとネパールの国境に近いネパール

領の片田舎で、土ぼこりの中に、降誕の聖地がある。今は菩提樹（原名ビッパラ樹）の巨木の枝におおわれるように白堊のマーヤ（釈尊の生母マーヤ王妃名）堂があり、その半地下のうす暗い室の正面に、マーヤ夫人が無憂樹の華枝を手折らんとする右脇から、誕生された小さな釈尊が天（右手）地（左手）を指して、「天上天下唯我独尊」と宣せられたことの表像を刻んだ石仏が安置されて、仏は参拝者の捧げる線香と共に、合掌礼の衆生を昭鑑されている。

○無憂樹の降誕……マーヤ王妃が御出産のために、お里帰りの途中、阿輪迦樹（原名）下の降誕を、この木を無憂の木、その華を無憂華と訳され、そのお誕生を、降臨と受けとめた伝説に、釈尊を讃仰する真摯な態度を想う。中高木の落葉樹（マメ科）アシユカの若葉淡紫色に、赤色又は橙色の花をつけた小枝は、さぞかし手折

りたくなる美しさであつたろう……。

○現行七歩……釈尊は生れおちると直ぐ、誰に助けられることなく、前後左右に七歩を行かれたとすることは、煩惱に障けられて、常に六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の迷道生活）輪廻することを超脱して、真実道に生きることを勧説された釈尊の教旨を、御出世の本懐として、その御誕生を意義づけた。

○「天上天下、唯我独尊」……「誕生偈」として、釈尊降誕の意義を宣べるもので、詳しくは、「天上天下、唯我独尊、三界皆苦、我当安之」とし「人界に生を得たる我は、天にも地にも二人と居ない尊さがある。凡夫が生死往来する世界は皆苦界である。我はこの苦界を安穩に生きる世界とするであらう」との意味で、この誕生時の宣辞は、釈尊仏教にとって、人生の尊厳と自覚の勸奨として拝承すれば、私は私ながらの使命感を覚える。

成道の聖地にて 成道は、成仏得道であり、得涅槃、正に有余（依）涅槃であると前述さ

せていただいたが、前党王山の苦行林を去つての菩提樹下瞑想である。釈尊の成道を記念する高さ五〇メートル余りの大塔が聳え立つ此所ブッダガヤこそ、生死輪廻の迷執を断絶して、天地と共なる吾が生命の真実を覚悟（さとること）せられた聖地である。チベットの僧や、西洋人の僧が、黄衣をまとつた五体を地に投じて、合掌礼拝を繰返す敬虔な姿（五体投地或は五輪著地）、両肘・両膝・頭（額）を地に著ける恭敬礼拝の伝承に、修行者に敬意を覚える。

大塔の内陣に「触地印」の尊像を拝み、裏に廻れば菩提樹の巨木の前に、釈尊の開悟を記念する金剛宝座がある。

○菩提樹……この樹木は、畢針羅樹が原名であったが、釈尊の樹下開悟から菩提（悟の意味）樹、覺樹、道場樹、思惟樹と、悟りに関係ある意味の名で呼ばれる。

○大塔……塔は塔婆であるが、それを精舎に当てる場合もあつて、ブッダガヤの大塔は、九階建の精舎である。

○触地却……右手を大地に触れさせる形印であるが、開悟を意味するところから、それを証す証誠印・煩惱魔を破ることから破魔印・悟りによつて天地震動の意味で驚発地神印とも云う。

初転法輪の聖地にて 初転法輪の地は、サルナート（鹿野苑）で、釈尊は開悟の淨い心境に没りつつ、苦海をわたる実人生の指針を衆に分ち与えて、自他共に一期の人生を有意に生きる喜びを悦びしながらも、他に法を説くことを逡巡せられた。そこに梵天の勧請あり、初の説法に阿若橋陳如他四人の五比丘（出家して二百五十戒を受けた者）を済度せられた。

○梵天の勧請……バラモンの最高神の音なき声に、釈尊が感応された釈尊の御意志の確定として、

泥池の中の蓮の諸形相を、衆の機類に当てた
対機応機の覺えと解すべきものである。

靈鷲山の聖地

王舎城趾を眼下に遠望す

るこの鷲の峯（山頂の岩形に由来）、香室跡を正面に遺る一画の台地こそ、釈尊說法の大獅子吼の御法座で、正に、三十大千世界震動し、妙華の法雨降るとの經意を、しみじみと、全身全靈に受けとめさせて戴けた現地である。

「仏の説き給える所を聞き、歡喜信受、礼を作して去る」感涙の下山であった。

涅槃の聖地

ここクシナガラは、釈尊が、

仏垂範涅槃略説教誡經（別名四十二章經）所説の遺誡畢つて、入涅槃（註）前述の地である。一同唱和の勤行に、別して經の序説を小聲で暗誦しながら、台座の大涅槃像を拜む私であった。

止筆するに当り、釈尊の伝記は全て、「南無阿弥陀仏」に結歸することを陳述させてい

ただきたい。

（付記）

仏蹟巡拝の土産は、私自身にいただいた信心と、菩提樹の葉に描かれた釈尊像十数枚、真鍮の花立て大小二対、皿六枚、香炉に用いる蓋付容器は、釈尊の母国の品をもって、寺の涅槃会に大軸の前に供したい献上の寸志で、菩提樹の珠数は法縁に贈る記念品であった。

◎“維持会員”への

ご加入のお願い！！

年会費金二万円のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊誌『浄土』刊行に暖かいご支授を賜わりたく、宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

(話) (法) (会) (榮) (涅槃)

怠たらず精進せよ



なり
成 田 光 俊
こう しゅん

(横須賀市専福寺住職)

——月明りの中で沙羅双樹に囲まれた涅槃堂がくつきりと浮かびあがっている。その一角を眺めながら、クシナガラの前庭に座った十四、五名の男女は、現地人たちが称える讃歌をうっとりとした表情で聴きほれている。荘厳な歌声は、人々の心琴をうるがせ、いまは亡き釈尊が姿を現わしたかのように合掌しているのだった。

釈尊成道の聖地であるインド、ビハール州

のブッタガヤに、国際仏教興隆協会の手で日本寺本堂が建立され、その落慶法要に訪れた十五年も前の出来ごとが、今でも鮮やかに浮かんでくる。……異国の地を訪れ、入仏落慶に随喜した私たち一行は、釈尊が入滅された地クシナガラを訪れた。クシナガラに行くには、鉄道を利用するのが最適のようである。初転法輪の地サルナートをあとに、ペナレス駅を午後十一時頃の夜行列車に乗り込むと

翌朝早くにゴラクプールに着く。列車の旅はわずか六時間位である。ここからクシナガラまでは五十五キロ。車で一時間半位の場所であつたが、むかしマルカ族が所有していた淋しい辺地であつたといわれるだけあつて、訪れた時も、地名はカシアと変えていたものの不便な処だつた。ここに、政府直営のホテル「トラベラス・ロジ」があつた。

ここは水の便が悪く、一滴の水も大切な処だ。そこは大勢の人が一度に行くと、顔を洗うのさえ困るくらいである。まして風呂は問題外といえる。たつぷりした風呂水が当り前と思つてゐる人は閉口する。いつか、雨水しかない地を訪ねた時に、私が入る風呂だけを一杯にしてくださつたことがあつた。その時に、好意に感謝しつつも、如何に水を使わないかを考えつつ風呂に入つたことがある。

だが、ここではそれどころでない。蛇口を

最高に開けても、タラタラと落ちるだけである。このありさまに同情したロッヂの方々が外からバケツで湯を運んでくれる。これにも限度がある。またその好意にばかり甘えてられない。膝にも満たない湯で、砂埃りと一日の汗を流した。その直後に襲つてきたのが停電だつた。

薄明りの差し込む部屋に佇んでみると「月の明りが綺麗よ」誰れかが叫んだ。その声に誘われるように何人かの人たちが庭に出ていった。ほとんど同時に、また誰れかの「涅槃堂が美しいワ」驚嘆の声がした。

三々五々に集つた人たちは、いつとはなしにロッヂの前庭に車座になつて座つてゐる。美しくしい月、沙羅双樹の森に囲まれ浮きでたような涅槃堂の尊厳さに打たれて、仏祖を称える詩吟を一行の女性が吟じた。美しい声に引きよせられて、ロッヂに勤める現地の方

々が集ってきた。朗々とした詩吟が、ロッヂを、茫々としたクシナガラを包むように流れてゆく。

現地の方々によると「停電は時々あって、当分は直らない」という。旅行者にしては困ったことであっても、現地の方々はさほど気にしてないことである。これが日本人との差なのかもしれない。いかにも大陸的である。が、当惑した顔を瞬時に見て取った現地の方々は「記念に讃歌を称えましょう」と、にこやかに話した。

それは素晴らしい讃歌だった。入滅した釈尊も悲しむというより、いま現に在しますところの釈尊をたたえろものだった。煌々とした月明りの中で受けたこの感動は生涯忘れることが出来ない涅槃の想い出になった。

涅槃は、煩惱を滅却して、迷いのない、絶対的自由になった境地を指す言葉だったが、今ではほとんど、釈尊の入滅を指すものとして用いられている。それだけに二月に入ると多くの寺院では、涅槃図をかかげてある。その涅槃図を見て幼児は悦び、また驚いてもいる。

涅槃図には、悲しむ姿の仏弟子。悲歎にくれた会衆、動物の姿があるが、その中に「ネコ」はいない。幼い時、ネコのいない不思議さに「なぜ、ネコがいないの」執ように迫ったことがある。「お迦釈さまが亡くなられた時に、動物にも知らせがあったんだよ。ほかの動物は急いでお釈迦さまの処に行っただよ。ネコは、おめかしをしてたので遅くなっただんだよ。それで絵の中にないだ。お前も他人に呼ばれたら、すぐに返事をして、急いで行かなくてはいけないよ」と、言われた覚

えがある。

ネコが涅槃図に描かれていない理由の真偽は別にしても、話をしながらいつの間にか幼時教育を受けた記憶、これも涅槃にまつわる思い出である。

二十九歳で生地を出られた釈尊は、六年間の苦行のすえに三十五歳で悟りをひらかれて以来、四十五年間という長い年月を伝道ひとすじの旅を続けられたのですが、八十歳という高齢を迎えられた時に、ヴェーサーリーの町から故郷に向って最後の旅に出られた。ハッティ、アンバなどのいくつかの村を通り過ぎて、パーヴァーという村の鍛冶屋が所有していたマンゴーの林にお入りになられた。

「釈尊がお入りになられた」自分の林に尊敬する釈尊が入られた、こんな嬉しいことは

ない、そう思った鍛冶屋の子チュンダは、早速にきのこ料理の接待をした。

ヴェーサーリから百七十キロの旅をされた釈尊は、喜んでその供養を受けられたもののやがて激しい下痢をされ、全身に痛みを感じられたのである。しかし苦しみ耐えつつ、一歩、また一歩と旅を続けられた。そしてクシナガラのある森にお入りになると、沙羅双樹の木の間衣を敷き、右脇を下にして横たわれたのでした。

苦しみのなかをクシナガラに向ったのは、心からの供養してくれたチュンダを悲しませまいとする慈悲の心である。その心を持たれた釈尊は、この地で阿難をはじめとする人々に最後の説法をされた。

阿難は「私には学ばねばならぬことがあるのに、師は涅槃に入ってしまう」と悲しみつつ泣かれていた。釈尊は阿難を呼よぶと、

「阿難よ、悲しんではならない、泣いてはいけない。私は前にこのように説いたではないか。すべての愛しいものであっても、別れなければならぬものがある」と

また、クシナガラに住んでいたスバッタという修行者が訪ねてきたときも、阿難は釈尊の身を案じて断つたものの、釈尊はスバッタを呼び、聖なる道を話し、私は真理の道を歩んで来た。これ以外の道はない」と説法している。最後まで道を求めてきた者に法を説こうとする慈悲と法の正しさへの確信の現れである。スバッタの願いで彼を最後の直弟子にした釈尊は、全ての人々に最後の説法をされている。

「あらゆるものは、移り去るものである。怠ることなく、精進せよ」と。

クシナガラの木立に囲まれた境内の中心に

屋根の四方に古代窟院形式の丸窓がある。大理石づくりの寺院が建立されている。この涅槃堂には六メートルにおよぶ巨大な涅槃像が、頭を西に向けて安置されている。これは五世紀ごろの作といわれ、一八六七年の発掘で見されたもので、台座には、釈尊入滅のとき傍にいた阿難、最後の弟子となったスバッタなどの悲しみにみちた姿が彫られている。この涅槃像は普段は黄衣で被われているのだが、ビルマ僧は黄衣をとられ、私たち一行に全体のお姿を親しく拝ませてくださった。全身は金粉で覆われ金色に輝いている。釈尊の静かな面ざし、安らぎの姿が、涅槃の石仏にきざまれていたのが心に生きている。

クシナガラの讃歌は、苦しみを押え、静かな面ざしで、安らかなお姿で最後の直弟子スバッタにされた説法を、いまの私たちに語りかけているように聞える。「怠たらず、精進

せよ」の言葉は、幼い時に涅槃図の前で、他人から呼ばれたらすぐ行くのだぞ、と諭とされたものと一脈通じる姿である。

いま精進という言葉は、遠い世界に行きつつあるように思える。科学が進み、文明が発達したとはいえ、安易な生活だけを追い求める姿は、悲しく淋しい。

私たちの住んでいる社会は、どちらかといえば科学。文明のみに傾斜している。大自然のお蔭で生かされているにもかかわらず、その自然をおそれることもなく、海底を、森林を我がもの顔に自由にしようとしている。まさに人間だけが、偉大なものであるといわんばかりの振舞いである。これこそ精進とはほど遠い姿である。他をも考える心が必要である。

いま涅槃会を迎え、私たちの進むべき道をしっかりと見つめることが大切である。

(好)
(評)

『仏事と信仰生活・浄土宗』

宮林雄彦編

四六判 一四四ページ

定価八〇〇円 (二二〇〇円)

◎浄土宗の檀信徒には必携の書!!
平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

△発行▽

図書出版 群書

〒170 東京都豊島区巣鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東京七一六八七五九

心の積極的轉換

— 思いやる心、その実践 —



原 はら
口 ぐち
正 しょう
弘 こう

○心が通じる

「バチン」十歳ぐらいの女の子が坂になっ

ている参道を駆けおりながら手を叩いた。女の子は園児服を着ている。これから幼稚園へ行くのだろう。女の子は下までおりたところで振り返った。あとから来るお母さんに手を

振っている。走りながら手を叩いて何かうれ
しいことでもあったのだろうか。私もまた参
道をおりて行く。参道脇に坐している石の仏
さまにふと目が移った。私にも何かいいこと
がないかな。

○邂逅

仏教を学び／＼学び尽くしていつて、仏教
から人間を掘り返していくことが多いが、む
しろ人間として人を見つめていき自己を考究
して、どの様な形で仏教に行きあうか、そう
いう意味で生活の中に溶け込んだ仏の教えの
実践者、仏のようなココロを持つ人たちがご
く身近にいることを知ったとき、その邂逅に
感謝の気持ちが湧いてくる。と同時に、書物
の中にあるいは他人からの話の中で、そのよ
うな人と出会えることもすばらしいことだと

思っている。

○酒井抱一

江戸時代後期に酒井抱一なる人物がいた。
芸術家抱一の人生観は私に興味を引くものな
ので紹介する。

抱一は隠居の身であつた。そして酒井家本
邸の家来たちに井戸を造らせる。

良い井戸水は深い井戸から得られる。しか
し真に良い井戸はそれでもまだ不足なのであ
つて、一度深く掘り地下水が出た上にずっと
石を入れて、深い井戸底を見せず、恰も浅い
水を汲むが如くに見せるのをもつて良しとす
るのだという。出来上がった井戸に彼の妻は
不満であつた。その井戸は深く掘ることをし
ないで、石も適当に幾重か並べただけで、恰
も深く掘った上に厚く石を積んだのと同じよ

うにうまく仕上がっていることを知っていた。

抱一は不満を洩らす妻にいう、「本来、石を積むのは底を見つめないためだ。井戸の水も川の水も、余り深いところを見つめるのは良くない。見つめすぎれば恐ろしくなり嫌になる。詮じていえば深く掘って厚く石を積むのも、浅く掘って薄く石を積むのも、目くじら立てて詮議立てをすれば、そもそも石を積んで底をかくすことの意味さえなくなってしまうのだ」と。

隠居の抱一への出費を考えて家来たちが井戸を造ったとすれば、抱一はトコトン突きつめてそれを暴くことを好まなかった。突きつめるとき、ひとの世は嫌な見たくない一面を露呈する。本当に深い井戸の底にこそ良い水があるのであろうが、それを確かめるのは抱一の人生観にはなかった。むしろ苦心して、石が厚く積んであるように仕上げようとした

家来たちに気付かぬふりをして喜んで見せることの方が、どれだけ水の味を良くすることだろう。

あたかな抱一のやさしさは自分に対しての敵しさがあつたればこそである。ゆとりがそれに加わって初めて他人への思いやりの春風を送ることが出来る。

○見えない残りもの

足許に咲く草花をみて、お母さんが「あら、綺麗な花が咲いているわね」と立ち止まる。子供は近寄って花に目をやる。目に見える花がそこにある。母親は歩き始める。子供はついていく。だんだん花からは遠ざかり、やがてその花は見えなくなる。でも子供の心の中には、母親の「綺麗な花が咲いているわね」の言葉が残る。

茶道や華道のお稽古ごとの場合、武道などもそうだが、みな反復練習だ。いずれも心髄は理論を超えたところにある。云わば体得というものである。求めてすぐ会得出来るものでは決してない。芸や技の上達だけでは本人は満足しないだろう。しかし先ずはやってみることだ。

物を運ぶときは力が入る。力を出せば力は残る。力が減るのではなくて残るのである。知恵にしほれば知恵が残る。人に親切にすれば親切がその人に残る。たとえ見せかけであっても親孝行をすれば親孝行が残る。

○里帰り

落語に「里帰り」という面白い話がある。で、これもご紹介しよう。

ある娘が好きになった彼氏のところへお嫁

に行きました。しかしどうもお姑さんとはウマが合いません。何かにつけて気に入らないことばかりでとうとう嫁は実家に帰ってしまいます。実家では父親が娘の気持ちを察して「どうしても我慢出来ないのなら、この薬をあげるからお姑さんに飲ませて殺してしまいなさい」と言いました。父親はさらに言葉が続けて言いました。「それにはひとつ条件がある。それはこの一年間はお姑さんの言うことは何でもはいはいと聞いて笑顔で対応しなさい。朝も早くから起きて掃除をし、食事の後片付けは率先してやりなさい。お風呂は一番最後に入り、それからお姑さんの肩も揉んであげなさい。そうして嫁と姑はとても仲が良くうまくやっていると近所の人達にも思わせなさい。そして一年たったらこの薬を飲ませなさい。お前が疑われることはないだろう。何故なら、皆口をそろえて『あれ程仲の良か

った嫁だもの、姑を殺すはずがない』と言うはずだ」それを聞いて娘は大そう驚きました。が、とに角、父から渡された薬を持って帰って行きました。

そして一年後、嫁は潑刺^{はっし}とした元気な顔で帰って来ました。父親は娘に、薬を姑に飲ませたかどうか聞きました。娘は答えました、「とんでもありませんわ、お父さん。私がお姑さとの言うことを何でもはいはいと聞くようにしたら、お母さん(姑)はすっかり人が変わってね、私にやさしくしてくれるようになります。近所の人達も」とても可愛くていい嫁だ」と褒めてくれます。この薬はもういいりませんからお返しします」というお話しです。勿論、薬は毒でも何でもありません。実はただのウドン粉だったのでした。この落語は春風亭柳昇のオトボケの語りで楽しむことが出来ます。ごく身近かな話題を取り入れて、

よくよく聞いてみると教えられるところが落語の中には沢山あります。

「押してだめなら引くに限る、突っ張りすぎると引っ込みがつかなくなる」とか「柔よく剛を制す」など、生活の中から、生活の知恵の中から湧き出た言葉には、共に生きる、共生きの、「和」の精神が漲っています。

ところで先程の落語の「里帰り」を聞いて思い出すのは、よく知られている仏教に出てくるところのキサゴータミーの話である。

キサゴータミー……。

それは子供を亡くした若い母親の話です。半狂乱のゴータミーは釈尊のもとへやって来て「死んだ子供を生き返らせてくれ」と号泣して懇願します。釈尊はその様子をじっとご覧になっておられ、やがて「お前がそれ程までに頼むのであればその願いを聞き入れてやろう。その子を生き返らせてあげよう」と言

われます。そして母親に一つの条件を示されます。それは「芥子粒をひとつ村へ行ってもらって来なさい。ただし、これ迄に葬式を出したことの無い家からのものでないとだめだ」というものでした。

彼女が一軒一軒村の家々を尋ね歩くうちに彼女自身の心の内部に変革が起こってきます。村の人達から返ってくる言葉、「私の家では三年前に夫を亡くしました」とか、あるいは「ほんのひと月前に息子が死んでいます」の言葉を聞いていくうちに、彼女自身のもつ深い悲しみが自分だけのものではないことに気付いていきます。

釈尊は彼女に一つの試練を通して、悲しみは悲しみとして大事にしながらも、積極的に生きていくことの尊さを説いていきます。

これがキサゴータミーの話である。

相手の立場に自らを置いて考えることが出来る人は事業を発展させる上にも、教育にたずさわる職にあるときにも、スポーツ指導者としても、そして人間として、もっとも素晴らしいことではないだろうか。

私自身が、心の奥底におだやかな心を持ち、慈悲の目でもって、周囲のすべての人、あるいは動植物、一本の草花にいたるまで接することが出来るとするならば、そして悩み苦しみ呻くものたちの為に何かをすることが出来たとすれば、私自身がこの身でここに「観音」を現出することになりはしないだろうか。ある人は、こう言っている。「仏の言葉をただ言葉として語ったところでスピーカー程の役にも立たない。仏の言葉を自分なりにどのように理解し、それをどう受けとめ実践していくのか」と。観音経普門品には「慈眼でもって衆生を視る」とある。

特別寄稿

「須弥山の世界」補足

後藤真康

(東京・江東区円通寺住職、農博)

先に「須弥山の世界」を書き、存統上人作の「世界大相図」の内容を中心に、須弥山世界観を紹介させていただいた。その後、書き落としたことや新たに気が付いたことが次々でてきたので、今回は補足という形で書かせていただきたい。

参考書：先に須弥山に関する解説書はほとんどないと書いたが、「仏教の宇宙」(大橋俊雄、東京美術選書四七、一九八六)があるのを知った。この本には「俱舎論」や「長阿含経」の記載が詳細に解説されており、円通上人の事績も紹介されている。須弥山世界観は初期

の經典である「長阿含經」のうちの「世記經」や「立世阿毘曇論」に詳しく説かれており、五世紀に世親が選述した「阿毘達磨俱舍論」の「世間品」で大成された。これらの經典は「国訳一切經」（大東出版社）にすべて収録されており、詳細な脚注もついているから、これを読めば一番間違いない。しかし、緒經の記載は繁雜でいささかうんざりするし、世界の体量や三災、三劫などが飛び飛びに説かれているので、なかなか全体を把握しにくい。その点、存続上人は実にうまく緒經のエッセンスを抽出し編集されたものと改めて感心する次第である。

毘沙門さま：須弥山の中腹、四王天に住する四天王の一人、「北方多聞天」の別名は「毘沙門天」である。この天（神）は遠く古代インド神話のヴェーダにもでてくる神で、クベラ神といい、雪山中のカイサーラに住み、夜叉を統括して北方を守護する神であった。そこで仏教では四天王の一人として須弥山の北面を支配し仏教を守護する天王とされたのである。ところが何故か四天王のうち毘沙門天だけが一本立ちして信仰されるようになった。毘沙門天について説かれたお経は「長阿含經」を始め非常にたくさんある。後世には密教系の「十二天」にも入れられ、ご承知のように「七福神」にも弁天とならんでインド代表の形でおさまっている。毘沙門天を祭ったお寺は日本でも東大寺、鞍馬寺はじめ数多くある。「太平記」によれば、楠正成は大和信貴山の毘沙門天に祈って授かった子なので祈名を多聞丸といったという。クベラ神は福德財宝を掌る神でもあったので、日本で

も毘沙門さまは始めは猛々しい武神であつたのが、段々礼徳の神の印象を強くしている。なお、十二天とは「梵天、地天、日天、月天、帝釈天、閻摩天、水天、毘沙門天、火天、羅刹天、風天、大自在天」の十二の護法の神である。ついでに七福神は「大黒、恵比須、毘沙門、弁財天(弁天)、布袋、福祿寿、寿老人」である。

理想世界、北俱盧洲：毘沙門さまだけが何故もてるのか、それにはこんな理由も考えられる。大相図には書かれていないが、「長阿含經」では四大洲の一つ、須弥山北方の北俱盧洲(鬱單越)を一種の理想世界として描いている。すなわち氣候温暖で地面はやわらか、美しい林や花園、果樹園があり、水の清らかな流れや池、泉に富んでいる。悪獸や毒虫はいない。耕さなくても穀物が実り、ただ蒸して食べればよい。住人の寿命は千年で、死後には天界に生まれ変わるといふ。これは酷熱の国インドの人々が、北方ヒマラヤのかなたに暑さを知らない理想郷があると空想したのでと言われる。こんなことから北方守護の多聞天の人氣が高まったのであろう。そこでヒマラヤの北、西域のコータン国で毘沙門信仰が盛んになり、これが中国へも伝わった。中国では古来、北方遊牧民族の侵攻に悩まされてきたから、北方の守護神は当然重視されたであろう。日本では最初の征夷大將軍、坂上田村麻呂が觀音と毘沙門天を深く信仰した功德により、東北鎮護に成功したといわれるのは以前にも書いたところである。

もう一つの理想郷……大相図では北俱盧洲については特別に記載していないが、閻浮提図の方にはもう一つの理想郷のことが書かれている。「阿毘曇論」によれば、釈尊在世の頃脛の長い人がいてはるかに閻浮樹を見通すことができた。その時彼は雪山の向こうに六つの国を見た。(国の名もあげられているが省略する。)これらは天竺王の子孫の国で、住人に常に善を為して悪を為さない。種を蒔かなくても麦が実り、その麦には穀がなく、蒸して食べると蜜のようにおいしい。牛がたくさんいて、その牛は死期が近付くと自分で人間のそばにやってきて死に、人に食べられるという。存統上人はこれは今のヨーロッパや北アジアではないかと案じている。それはヒマラヤの北方、北海の南方にあり、麦や牛が多いからである。今は人の寿命が減ずる滅劫の時期で、人間が悪いことばかりするようになったので、穀物も耕作しなければそだたないし、気候も不順になってしまったのだそうである。

猫牛州の原典……先に、存統上人は「閻浮提図」の作成にあたりアメリカをわざと無視したと書いたが、多少の疑問が残っていた。南北アメリカ大陸は江戸時代初期の世界図屏風にも書かれており、これを無視するのはかなり勇気がある。それに、図の右隅のアメリカに相当する場所に「勝猫牛州」と書かれた陸地がちょっとばかりのぞいており、猫牛州の原典が不明だったからである。猫牛州……めごす……メキシコではないかという人もいますが、まずわからなくなりました。ところが「織田仏教大辞典」(織田得能、大蔵出版、一九五四)に、「俱舎論光記」十一(唐でつくられた「俱舎論」の解説書)に「遮末羅、此ヲ猫牛ト言ウ也」と書

かれています。したがって、存統上人は「俱舎論」に書いてある閻浮提付属の二中州「遮末羅（カマラ）、筏羅遮末羅（アバラカマラ）」の名前として猫牛州、勝猫牛州を採用したのである。この方が親しみ易い。そして、これらがオーストラリアとアメリカに相当するとこじつけることによって閻浮提世界と地球との妥協をはかったのだと思われる。猫牛州の名は「俱舎論」や「長阿含経」にはないから、存統上人は「俱舎論光記」も参考にされたのであろう。七金山等の名前も同書からとったのかも知れない。

閻浮提図の原典：閻浮提図が書かれた文化五年（一八〇八）以前に流布していた最新の世界地図としては、先に書いたように司馬江漢の「地球全図」（一七九二）や橋本宗吉の「新訳地球全図」（一七九六）等がある。「地図の歴史」（織田武雄）の挿絵だけがたよりだが、存統上人の図はこのうち司馬江漢のものに一番近い。これはオランダわたりの最新の地図をもとにし、日本最初の銅版画の技術で作成されたもので、東西両半球の図からなっている。このうち西半球図が存統上人の図に大体あてはまる。一番の証拠はこの図と存統上人の図だけに赤道と南北回帰線が正確に書き込まれていることである。問題のカラフトの図はどうなっているか、「混同江」の名があるか、小さな挿絵なのではつきりしない。いつか現物と照らし合わせてみたいものである。

「嬌」の字：「世界大相図」には「六天嬌ヲ成ス」と書かれていると紹介した。嬌とは

漢字辞典にも載っていない字だが、「国訳一切経」では「姪」の字を使っている。これなら意味がはっきりしている。姪の字は存統上人がつくったのか木版職人の間違いかも知れない。なお、四王天と三十三天の住人は人間同様体を交えて姪を成すが、気体を排泄するだけで情が満足するのだそうである。

無師法然：「世界大相図」の世界の歴史（四劫）の説明のなかに「無師法然」という文字がでてくる。最初これは法然上人のことではないかと思った。しかし、しらべて見たらこの言葉は「俱舍論」のなかでちゃんと使われている。となると、これが「法然房」の命名の原典ではないかとも思え、手持ちの法然上人の伝記をいくつかあたったが、はっきり書いたものはなかった。いずれにしても、人間世界が乱れに乱れたところ、師もなく自然に禪定に入り、「離生喜樂ハ甚ダ樂シ 甚ダ静カナリ」と唱え、他の人もこれを聞いて天に生まれ変わるとは、なにか法然上人の事績を予言しているようで感銘を覚える。

人類の寿命：「世界大相図」のなかの世界の歴史（四劫）の話は大変面白い。四劫の説は「長阿含経」、「阿毘曇論」、「俱舍論」に説かれ、その内容は大体同じだが詳しくは劫の長さや順番等の細部が異なる。大相図の記載の内容は「俱舍論」とほとんど同じだが、一つ違うところがある。「人類の寿命が十歳となり小三災（刀兵、疫癘、飢饉）が相次いでおこる初劫の終りに、空中に声がして人類に警告を発し、人々が悔い改めることによりま

た寿命が増加に向かう」という話は「俱舎論」等にはでていない。「長阿含經」では、人類の寿命が十歳と八万歳の間で増減を繰り返すのは自然の法則のように書かれており、人の業の善惡との関係ははっきりしない。あちこちに「このように世界は無常である」という意味の言葉が挿入さねており、諸行無常を説く例として四劫を説か九たという印象が強い。「阿毘曇論」には、「小三災の終りに閻浮提の一人の人が一万人の人を集めて善業を行うので、鬼神が彼らを守護して人類の種を絶やさないようにする」と、ノアの箱舟を思わせる話を書いてある。また、「俱舎論」では、「刀兵災のとき殺生戒を保った人は来世で闘争の災害を免れ、布施行を行った人は飢餓や疫病の災害を免れる。また、疫病の際、他人に同情し勵ました人は天界に生まれ変わる」と説かれている。いずれも大相図の説明と異なる。存統上人の記載だと人類の寿命の増減は人類全体の行動の善惡に係っているようである。何か他の經典によるのであらうが未詳である。

蛇足だが、近年のように天災や異常気象が続くと、これは科学が進歩しすぎて自然を改造したせいだとか、人間がぜいたくになりすぎたむくいだとかいう発言を耳にする。こうした反省も大切であらう。しかし、歴史的にみると、気象の異常や地震や噴火は度々起きている。「俱舎論」にも刀災は七日、疫病は七月、飢饉は七年七月で終る、と書いてある。あまりおろおろせずに、冷静に自然現象に対応する心を養うのも宗教ではないかと思う。

寄稿

乗り越え難きものの

吉田勇之助よしだ ゆうのすけ

仏教講演会でお話の開始前、一同で三帰依を誦える。人間としてこの世に生を受けたこと、そして百千万劫にも値遇うこと難しといわれる仏法に接する時を得たことが誠に有難いと、つくづく思う。

人間の生涯は無限の過去から永遠の未来に及んでいる「時」の中のほんの一瞬にすぎない。一寸先は不明である。この世に生をうけたものは、いづれもいつかは死んでいくので、これは自然の法則である。生をうけると同時に生物は死に向って進み始める。

わたしは、この「理」がわかっておりなが

ら、長い間、この「死」に対する恐怖に怯え続けていた愚か者だ。このこだわり（悪しき性格）を改め、煩悩、我執からどうかして早く脱し、清浄無垢な理想の世界、浄土へ往って生れたいと願っている。

「生と死」についての或る記念特集号を取り出し、名師の方々のお話を読みかえしていると往生について次のようにあった。

「しかし仏教ではただたんなる来生ということとはけっしていいいらないのです。浄土へうまれるか、地獄へおちるか、あるいは六道に輪廻するとか、さとの世界へうまると

かいているのであって、たんにこちらの座敷からむこうの座敷へうつるというようにはいていないのです。……」(元京都女子学園長結城令聞先生)

「……往生はこの身をもって往生することができるということでなければならぬとおもう……。往生とは生活であります。こころの生活であります。浄土は精神の王国である。

……」(元大谷大学長曾我量深先生)

法然上人行状絵図の御法語の巻一の中にあるものは、現在の私の悪しきこだわりの性格から離れられる指針になるとしていただいている。即ち、「念仏申すにはまったく別の様なし。ただ申せは極楽へむまると知て、心をいたして申せばまいるな也。」「……本願に乗ずる事は信心のふかきによるべし……」

「今日」とは、再びもどってくることのない「現在」のこととされている。速かに生死

を離れる要諦を身につけたいと願っているがただ願うだけであるので、死を乗り越えることはとても出来ない。常時、反省を忘れずにとめるのが精一杯のところである。

死に対するこだわり、恐怖は人間の本性であって自力でこれ乗り越えることはとてもなし得ない。

「つねによく気をつけ、自己に固執する見解をうち破って、世界を空なりと観ぜよ。そうすれば死をわたることがでざるであらう。このように世界を観ずる人を死王は見ることはない」(「スツタニパート」一一一九)。

「今日なすべきことをなせ」

「無上安穩の境地にいたりうる道は、まさしく存する。そして、わたしが導師としてある」(『仏教百話』)

仏陀釈尊の御教えは私にとって実に比類なき大きな心の支えになっている。

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(9)—

木きの下した隆りゅう一いち

ハチはその夏殆ど我が家で過ごしたと言っても、時々二、三日ふつといなくなるごとがあった。そして帰って来ると、いかにも疲れたといった感じでドタッと横になると、それきり動こうとはしなかった。声をかけてもジロツと無愛想に見るだけで、目をつぶるとフウッと大きな息をして、四肢を投げ出して、やがてスヤスヤと寝込むのであった。夏毛に変わって痩せが一層目立つようになった腹部を波打たせ、それは安心しきった寝姿だった。門の内はコンクリート張りの土間になっていて、殆ど直射日光が当たらなかつたら、ひんやりしていたのだろう、ハチは体温で土間が温まると寝場所を替えて、鼻先を蟻の行列が横切ろうが何をしようが全くお構いなく、まるで我が家の犬のような顔をして寝ていた。

初めて訪ねて来た人は、先ずハチの大きさに驚き、そして我が家の飼う犬でないことを

知って二度驚く。

「お宅の犬ではないのですか」

「この上の天理教の犬なんですけど、どこが気に入ったのか、自分で格子戸を破って出入口を作りずうっとこうしてますの。ウチでは、この子のことを通いの番犬と呼んでいます」

女性客と応対している母の声の中に、満更でもないというニュアンスが含まれているのを陰で聞きながら、いつも私は苦笑を噛み殺すのに苦労したことだった。

なぜか理由は分からないがハチは、概してきちんとした服装の女性には無関心だったが、子供と男性の訪問者に対しては、一応調べさせて貰いますよと言わんばかりにすり寄って、足許からゆっくり丹念に嗅ぎ上げて行くので、大抵の人は二の足を踏むのであった。

そんなハチにも一つだけ泣き所があった。極端に地震に弱かったのである。ある朝、その日も夜中から来ているらしく、私が玄関に出は時、ハチはすでに格子戸の前に寝そべっていたが、ピクリと顔を上げると、ヒーともスーともつかぬ寝き声を発し、すがるような目で私を見ると、よたよたと這い寄って来たのである。

「どうした、ハチノ お前腰が抜けたのか」

ハチが私に見せた唯一の哀れな姿に見当がつかず、首を抱いてやると、ハチは小刻みに体を震わせていた。と、その時地震が起こったのである。震度2程度の極く軽い地震で、十秒かせいぜい二十秒ほどで揺れは治まったが、その後しばらく、ハチは私の腕の中で震え続けていた。私には感じなかったが、まだ余震が続いていたのかも知れない。

私の古い句に、

夕端居今朝の地震の話など

というのがあるが、これはこの時のハチの様子から、犬に地震予知能力有りや無しやを父と論争した時の模様を句に起こしたものである。

出来るという私の意見と、出来ないとする父の意見はどこまでも平行線をたどったが、私の頭の中には、もしかしたら出来ないのではという危惧がちょっぴりあったし、父は父で、もしかしたら予知能力があるのではと思っていたかも知れないが、とうとう結論は出ずじまいであった。後に伊豆に住むようになって飼った仔犬は、伊豆大島近海地震の大揺れにも全く反応せず、私の予知説も大いに揺らいだが、ハチが地震予知の能力を持っていたことだけは確かだった。いや、確かだったと私は信じたのである。

二度三度時雨が過ぎて山の紅葉が深まった頃、ハチは一週間以上家を留守にした。夏が終われば来なくなるだろうと思っていたが、ハチは相変わらず、通い番犬をしていた。日当たりの悪い土間は冷たいから、一日中いるというのではなかったが……。他家の犬だから、家を留守にするという言い方はないのだが、感覚的にはその表現が一番びつたりしていた。いつ帰って来ても飲めるようにと、母は毎朝ボウルの水を替えてやっていた。

「どこへ行ったのかねえ、ウチの道楽息子。本当にしようがない子だ」

と母は冗談めかして言っていたが、来なくなると、心なしか淋しそうであった。

「今朝は水が少し減っていたから、夜中に帰って来て、また出て行ったのかねえ」

「気のせいだよ。ボウルの水もハチも、きつと蒸発しちゃったんだよ」

朝そんなやりとりがあった日の午後、西宮の知人を訪ねた帰り道、偶然にも私たちは八幡様の下の広場でハチを見つけた。この広場はバスの発着所に使われていたが、日に数えるほどこか便数がなかったので、女車掌がかまに木片を投げ入れて、送風器を廻している姿を見かけることは稀だった。いまだに私にはあの木炭自動車というものの仕組みがよく分からない。「車体に装着した木炭ガス発生器から発生する木炭ガスを燃料とする自動車」と広辞苑には出ているが、納得が行く説明にはなっていない。しかし窮すれば通ずと言うか、ガソリン以外の燃料で車が動いたのであるから、画期的な発明だったというべきであろう。まあそんな訳で広場は子供の遊び場となっていたし、またどういふ訳か、藁塚が二基、広場の一画を占領していた。ハチはその藁塚の前の日溜まりで、丸くなって寝ていたのである。先に見つけたのは母だった。

「ハチ！ 何でこんなところにいるの。帰って来ないから心配してたのに」

声をかけて近づく母の足音に、ハチは薄目を開けて母を認めると、お義理のように尻尾を振った。そして母が首筋の辺りを撫でてやると、横になって四肢を突っ張り、クウッと気持ちよさそうに伸びをした。

そんなハチと母の姿を、通りの向こうから一人の男が見ていた。男は広場の前の長屋の一軒に、「蓮見製造所、蓮見小五郎」という粗末な表札を掲げ、圧延機と裁断機を土間に据えつけて、古タイヤを加工して雪駄紛いの履物の底の部分を作るのをなりわいにしてい

た。古タイヤを適当な大きさに切り、その丸みを帯びた切片を圧延機にかけ、熱を加えて平らに延ばし、更に小判型の刃をつけた裁断機によって成型するのが、作業の手順のすべてであったが、古タイヤの焦げる臭いは辺りに充満し、二台の機械はかなりの騒音を、無遠慮に響かせていた。

雪駄紛いの、と書いたのは、私が雪駄なるものをよく知らないからである。物の本によれば雪駄は千利久の創意工夫によるもので、竹皮草履の裏に皮裏を張りつけたものとされている。草履の裏に何かを張りつけたものが雪駄だとすると、私が草履の範疇に入っていた履物の殆どは、正式には雪駄だったことになるが、古タイヤを張りつけた履物は、敢えて雪駄紛いのとしておく。そんな優雅なものではなく、なぜかヤクザの若い衆、それも兄貴分が好んで履いていた。彼等には、この履物は一種のステイタス・シンボルであった。運見小五郎は、五十歳前後の小柄な男だった。白髪のかった胡麻塩頭が私にそう感じさせたのだが、実際にはもう少し若かったかも知れない。黒縁の眼鏡の奥に光る目は、ちょっと近寄りがたい鋭さを持っていた。

小五郎は道突っ切って広場に来ると、

「奥さん、このハチを知ってっつてですか」

と声をかけて来た。

「ええ」

と答えて母はちよっとためらったが、ハチと我が家の関わりを話すと、小五郎の目がす

うーっと和んだ。そして、

「そうですか、そうですか、これはウチのハチの婿さんですよ」と言った。

「あら、お宅にも同じ名前の犬がいるんですか」

「偶然の一致というやつですがね」

小五郎が家に向かってハチと呼ぶと、庄延機の陰から小柄な犬が飛び出して来た。毛の色はハチよりも少し濃く、長さも多少長めであったが、姿のいい柴犬だった。雌のせいか優しい顔立ちをしていた。

「あら、可愛い」

母がしゃがんで手を差し出しと、雌のハチは尻尾を振り振り母の手を舐めた。

「こんな可愛いお嫁さんがいたんじゃ、帰って来ない訳よね」

「いやあ、私の方はええ婿さんが来てくれたんで喜んでいますが、なかなか帰ってくれなくて、あちらの家に悪くて……。帰れ、帰れと言っても、ハチにその気がなければどうにもならん。まさか叩き出す訳にもいかないし……。しかし、それにしても奥さんは犬の扱いをよう知っていなさる。余っ程多くの犬を手がけられたんでしょう」

小五郎は意外なことを言った。

「いいえ、ウチで犬を飼ったのは、この子が小学校へ上がる頃、一年ちょっとの間だけでしたけど……」

|| 新 刊 ||

安居香山 || 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇◇ B5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん}
弘^ぐ
の
生
涯
(二)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ}
浦^{うら}
行^{ぎょう}
真^{しん}

廃仏棄釈の嵐の中で

岩井智海の生家・安河内家は、たぶん明治

五年前後までのことと推定されるが、火を出した。父の市三郎は天保元年（一八三〇）四月の生まれだから、もしそれを明治五年（一八七二）とすれば、数えの四十三歳に相当する。

まだまだ働き盛りには違いなかったが、しかしこの災難は一家に決定的なダメージをあたえた。

猪野に住めなくなったのである。

失火した場合のそういう境遇は、都市でもしばしば見られることだったが、農村地区ではなおさらであつたろう。まして明治初年のことである。

一家の離散が始まった。

この前後については詳しいことがよくわからないが、岩井智海の岩吉少年は、

——甘木の葉屋などに丁稚奉公した。

と、伝えられている。甘木は福岡県中部の都市で、猪野の南東約三十キロにある、宿場と市場で栄えたところである。

それ以上には挿話なども伝わっていないので、どういう「丁稚」だったのか、まったく不明だが、後年の人柄から推して、たぶん、

利発でよく動く少年であつたことはまちがいない。

それがどういう事情で、商人の道に進まず、出家することになったのか、このへんのこと、もひとつよくわからない。

利発で文字を読むのが好きであるとか、先祖の供養のために、あるいは口べらしにといった現実的な理由で子弟を出家させることは、江戸時代からよく繰り返されてきたことだから、彼の出家も、あるいはその一つであつたかもしれない。智海の弟子でその跡を継いだ堺の大阿弥陀経寺の住職・山田智旭師によれば、福岡の唐人町にある成道寺十六世の岩井境普に見出されたのがきっかけで、その弟子になったのだという。

もっともこの境普和尚には当時、跡を継がせる子どもも系累もなく、それで岩井に入籍して養子となること、入門の条件として付

け加えられていたらしい。

こうして彼は得度をうけ、名も智海と改め、岩井姓を名乗ることになった。そしてそれは出火の時期とも関連してくるのだが、たぶん十一歳のころのことではなかったかと考えられる。それについてはのちに触れるとして、ここで、彼が正式な僧侶の認可が得られなくて、はらはらすという場面が起きてくる。

原因は、明治史に悪名を残しているかの「はいぶせき廃仏棄釈」にあった。その経緯を、智海がみずから書いていたので、すこし長いが、いろいろな意味で重要と思われるので、引用することにする。

『明治維新の当時、合併大教院なるものが設けられ、それが初め麴町の紀尾井町にあったが、後増上寺に移された。そしてその当時、

一、敬神愛国の旨を体すべき事

二、天理人道を明らかにすべき事

三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

き事

といふ教憲(注2)三ヶ条なるものが定められ、僧侶もそれ以外を演説してはならぬ、宗義を説くことはならぬといふことになり、然してこの教憲三ヶ条を説かせて教師補に任命し、その教師補になった者が伝導するといふことになって居った。

私が僧侶になった時は、この教憲三ヶ条の試験を受けて僧侶になるのであったが、その試験を福岡の少林寺に於て受け幸ひに及第して、その認可を受くべき願書を出した。ところがその願書出した時はその制度であったのであるが、到着した時には廃止となり、合併大教院も解かれることになったので、願書は空しく却

下された。そのため私は、僧侶になることが出来ぬ。しかしその当時福岡市の区長（今日で云へば市長）をしてゐたのは平山能忍といふ人であつたが、その人は福岡市唐人町成道寺の檀家であり且成道寺の住職は私の師匠の岩井境譽師であつた上に、単に檀家であるばかりでなく師匠とは非常に交りの深かつた人であつたので、師匠は折角小僧が試験に及第したが、認可されぬので困つた、何かよき工夫はないかと氏が区長の任にあるのを幸ひ頼みに行つたのである。平山氏は是を聞き試験に及第した月日は廃止になつた月目より前なのであるから、到着の日に廃止になつたからとて認可せぬといふのは穩当でない（注3）と云はれ、殊にこの人は平野次郎国臣の兄弟であり、国臣の死を悼みそれに対しても一人の僧侶をつくりた

いといふ念に燃えていたことであり、それに先云ふ如く師と匠は格別の間柄であつたので、非常に骨を折つて下されその為め遂に認可されて僧侶となることが出来たのである。』（岩井智海「廃仏棄釈の思ひ出」）

この一文は昭和九年（一九三四）六月の「中央仏教」誌に發表されたものだが、それは智海が大本山増上寺の第八十世住職に就任して、ちょうど三ヵ月目に相当する。彼はよほどの「廃仏棄釈」になまなましい印象を持ちつづけていたらしく、この文の中でもさまざまに思いを吐露しているのだが、先の引用文に続いては、増上寺に大教院が移されてからは本堂の本尊阿弥陀如来が取り去られ、代わりに三本の御幣と三枚の鏡が安置され、山門の前には白木の鳥居が立てられて、各宗の管長

が冠^{かんむり}かぶって神官といっしょに柏手^{かしわで}をうったことを記したあと、「その増上寺へくることになったのは、誠に感慨に堪えぬのである」と書いている。

大教院というのは明治五年（一八七二）八月に設置がきまり、翌年一月から八年四月まで存在した、全国の寺院や神社などの本山ないしは本社のようなものだが、それについて五年十一月の教部省^{たつし}達は、「天下大小の神社はその社頭説教所を小教院と心得、天下大小の寺院はその寺院を以って小教院と心得、氏子及び檀家を教導せよ」と指導している。そして当初、それぞれの寺院では、寺でありながら仏の教を説くことは一切まかりならぬという、宗教的機関としての生命を奪われたような事態が演じられていた。

教憲三ヶ条というのは大教院の設置よりも早い五年四月に、明治政府によって公布され

た大衆にたいする一種の公民教育のガイドン
スみたいなものである。この方針に従って説
教せよというわけで、その説教者をさす教導
職なる名称も、ほぼ時期を同じくして使われ
ている。

智海が福岡の少林寺でうけたという教憲三
ヶ条の試験は、教導補となるためのものであ
ったろう。及第して願書を送ったときに神仏
合併教院が「廃止」になったというのだから
受験から願書提出までの期間は少なくとも明
治五年四月から八年四月まででなければなら
ない。それは智海の十歳から十三歳に相当す
る。筆者は彼の出家の時期算出の基礎をこれ
においた。

それだけではない。この時期の経験が、彼
をして布教師への道を歩むことを、決定づけ
たふしが強いからである。

智海の人生に強烈な影響を与えた「廃仏棄

「積」とは、いったいどんなものだったのだろうか。

廃仏棄釈が明治元年三月十七日の神祇局達と、同二十八日の太政官公布をきっかけに始まったことは、いまでは歴史の定説となっている。

しかしこの二つはともに「神仏分離」を布告したものであって、廃仏棄釈のハの字にも触れたものではなかった。前者は、神社に勤務する僧や別当に還俗を命じたものであるし、後者は、神社が「権現」などといった仏教語を名称に使ったり、仏像を神体にしたりすることを禁じた布告であった。

といってもこの事態は、とても現代の人にはすんなりと理解できそうもなく、やはり多少の解説が必要だろうと思われる。

日本では、仏教が渡来して約二百年近くがすぎた天平（七二九～七四八）ころ、すでに神社と寺院を併合したような宗教施設が出現していた。神は仏の生まれかわりという「本地垂迹」の思想が、そのころ民衆一般の間にも滲透してきたもので、神宮寺とか、なににの宮大権現などと呼ばれたものがそれだが、これは本来、固有の宗教である神道が多神教だったために仏教の普及をほとんど拒まなかったことと、仏教のほうが神道よりもはるかに宗教的哲学的に深いものを持っていたために、神道は仏教にすりよってゆき、仏教は神道の根幹である先祖崇拜をはじめとした民俗信仰を同化して、その普及を確実なものにしていた結果とみられる。そしてその神仏習合が、なんの不自然さもなく——というよりは歳月とともに緊密さを増しつつ、維新の成る明治のその日まで続いていたのである。

こう書いてくれば、読者はすでにお察しであらう。それはこの国が、外来文化を日本化してゆく典型的なパターン以外の、なにもものでもなかった。

それだけに神仏分離令は、大衆にとつて「突如」というの外はないのだが、もちろんそれには、強力な権力による作爲があった。

じつはこの神仏分離令は、維新の公家方の大立者だった岩倉具視いわたくらとくみの、秘書兼参謀といつた格の玉松操の発案なのであった。

ことは岩倉が、維新前夜の慶応三年（一八六七）九月、明治天皇の外祖父である中山忠能なかやまただよしら公家のなかの同志と、維新の青写真の下敷きをどれにするかで話あったのに始まる。

もっとも当時まだ「維新」という言葉はなかった。「王政復古」である。つまり政権を徳川から王朝の手に取り戻そうということで、その席上、忠能らは、

「後醍醐天皇すくねみことの建武中興けんぶちゅうきやう当時の制度にならうのがよいと思う」

と主張した。なんとも古ぼけた手本だが、当時、公家の間では「建武中興」が王政復古にたいする一種のキーワードみたいになっていたのである。が、岩倉がこれに賛成しなかった。「岩倉公実記」にも岩倉がただ、

——模範ト為スニ足ラズ

と言つたとあるだけで、詳しい理由にはふれていないが、おそらくは建武中興が改革の意欲に欠け、わずか三年で崩壊したことをもって、これを忌避したものと思われる。

そのかわり彼は会合のあと、

「どうしたものじゃろ」

と玉松に相談した。その玉松の返事が、建武中興よりもっと古かった。「岩倉公実記」はつぎのように書いている。

『操曰ク、王政復古ハ務メテ度量ヲ宏クシ規模ヲ大ニセンコトヲ要ス。故ニ官職制度ヲ建^{けん}定^{てい}センニハ、当サニ神武帝ノ肇^{もつ}基^{もと}ニ原^{もと}ヅキ寶^{かん}宇^うノ統一ヲ図リ、万機ノ維^{もつ}新^{あらた}ニ從^{したが}フヲ以^{もつ}ツテ基^{もと}準^{じゆん}ト為^なスベシ。具^こ視^し之^{これ}ヲ然^{しか}リトス』(句説点と濁点は筆者)

この簡潔な文章からは、ちょっと想像がつきにくいかもしれないが、玉松がこのように古色蒼然とした時代を持ち出したのには、理由があつた。

建武中興ではもう官職制度も整いすぎて、世襲による門閥体制がどっかと根をおろしている。これでは岩倉のような下級公家がせっかく運動して王政復古を実現しても、使い捨てみたいなもので出る幕がない。王政復古そのものも逆転してモトのモクアミとなる可能性が大きかった。

それに引きかえ、当時、神武時代については国学者たちの影響で、門閥はおろか「支配・被支配の論理もいまだ定かには形成されてはいないゆるやかな古代」という認識があつた。これなら下級公家の岩倉でも政治の表舞台に立ち、いま彼と連携を固めつつある各藩の下級武士とともに革新の采配をとり、時代を動かすことができるではないか、というのであつた。

それにしても仏法こそ災難みたいなもので、神武天皇を持ち出されては釈迦もへちまもあつたものではない。あるのは、祓^{はら}いと清めと祈りと靈の鎮魂を根幹とした(と思われる)、「神ながら道」だけである。付随的ながら、政策の方針としての神仏分離は、このときに誕生したといつていい。

余談ながら、そういう仲でありながら岩倉と玉松は、いずれ袂を分かつたねばならない宿

命にあった。岩倉は現実をあつかう政治家であり、玉松は視野の狭い理想主義者だったからである。

玉松操はもと公家の末流の出で、出家して宇治の醍醐寺に入ったが、生涯、女色に近づかず、酒肉を食らわず、嚴寒にも木綿のきもの一枚、火のそばに寄ったことがないという、ちょっと人間ばなれのしたストイックな人物だった。それだけに他人の弱点に苛酷なことも拔群で、戒律をさらに厳しくするような改革を主張したから、ついに一山の僧侶たちの総スカンをくらいい、大僧都法印までいったのに飛びだして還俗してしまった。

しかし、文章を書くことが苦手の岩倉が見込んだだけあって、彼の学殖は見事なものだった。それも仏教、国学、儒教と分野も広く、なかでも平田篤胤の平田国学に造詣が深く、平田を師と仰ぐ信奉者でもあった。

岩倉もこの玉松には一目おき、維新後、最後には天皇の「侍読」というものにまで拔擢したが、若いころから尊王攘夷を信念とするコチコチの皇道家で、新政府が攘夷をやらず開国政策をとったのに憤慨し、「われ、奸雄に売られたり」といい残して下野した。明治になってまで攘夷をやっていたら、全国各地に先進諸国の、治外法権の居留地ができていたりして、日本は身動きもつかなくなっていたろう。玉松は明治五年に没したが、六十年の生涯、ついに円熟することがなかった。

彼が師と仰いだ平田篤胤は、やはり国学者の本居宣長に私淑していた。それで彼は宣長の死後、その長男の本居春庭に会ってそのことを弁じ、「没後門人」という奇妙な資格を要求してついに許されたという人物だが、その学問的態度はかなり宣長とは違っていた。それは宣長国学の大部分をしめる文学的・考

証学的要素よりも、一部分である復古的思想をより重要なテーマにして取組み、国粹的排外的な神道主義の国学を作りあげていったことである。当然、仏教と儒教は批判の対象であり、ファナティックな性格も手伝って論理を超越して鋭く排撃した。平田国学が、非合理的・神がかり的とされるゆえんである。もっともこれは彼が、神官の元締である白川家や吉田家から、神職古学なるものの教授を委嘱されたことで、自乗されたふしもある。それがあらぬか、平田国学の信奉者は地方の神官や村役人に多かった。これがまた廃仏棄釈の火にはげしい追い風を送ることになるのだが、実際、彼の尊王主義は、幕末の尊王討幕の時流とうまくかみあって、一世をフウビしたのである。直系の弟子五百人、孫弟子および亜流を加えて千数百人、便乗的信奉者も合わせると五千人近いといわれた。

慶応三年十二月九日、小御所（京都御所内）でのクーデターに成功して維新政府が成立すると岩倉は議定（ぎてい）となり、玉松は徴士（ちきし）内国事務権判事というのに取り立てられた。議定は閣僚級であり、徴士はキャリア組に相当する事務官といったところである。そして果然、でてきたのが、前述の「神仏分離論」であった。クーデター成功からまだ三カ月余りしかたっていないが、意図するところは神社から僧侶を追放して、神道を国教にしようというわけであった。実現したあかつきには、神職はすべて役人となり、国家から俸給を支給されることになる。そのためにはあらかじめ僧侶を排除しておかなければならぬ……。

いうまでもなくこれは、神武時代の「祭政一致」を想定した、玉松の主張の実行なのであった。実施にあたったのは各藩の役人だが、いうまでもなくその中には、先に述べた平田

学派の信奉者もいたのだから、実際に進行した状況が、布告のわくを越え、峻厳無謀をきわめたのは、当然というものであったかもしれない。

いまに伝わる記録から、廃仏棄釈という暴挙の色分けをしてみると、おおよそ二つに分けることができるようだ。

一つは、神仏分離令にもなつて行われた、神社との併設寺院などの破壊である。分離令ができるまでは、村や町の氏神などは別として、ちよつと気のきいた神社にはみな、神職とは別に、実権を持った僧職の住持する寺がくつついていたものだが、こうした別当寺院の叩き壊しなどがこれに相当する。

もう一つは、分離令でたのを好機として、神社とは何の関係もなく、「お上」の権力を

かさにきて一方的に、むりやり寺院の癪合・整理を断行したという、この二種である。

この粗暴な破壊行為の振る舞いは、どちらも似たり寄ったりで甲乙つけがたいが、しいて言うなら、後者のほうがひどかった。それは推進者たちに、先に述べた、平田派の神道家や国学者が多かったからである。いわゆる「坊主憎けりや袈裟まで憎し」式の、宗教に特有な排他性と攻撃性に衝きあげられた暴発が、このように強かった。

岩井智海は、先にあげたのと同じ一文のなかに、廃仏棄釈当時の悲惨な実例として、

『……仏教をやめれば財産はそのまま与へるといひなどし、中に稜々たる氣骨を持つてゐる者が「どういふ罪跡によつて仏教をつぶさねばならぬのか」と反抗すると、生意氣など云つて頸を切つて荒縄

でくゝり、門に吊ったといふことである。』

という挿話を書いている。いかにもありそうなことであつた。そして筆者は、これが具體的にはどの時点でどの地方に起きたものか、突き止めにかかったものの、ついにこの稿を書くまでには果たせなかつた。その無残さは別として、しかしこれはおそらく偶発的な殺人事件であつたと思う。廃仏棄釈の過程で、殺人にまで及んだものは皆無ではないが、数は少なかつた。

事態は政策の遂行という形で、一種の陰険さをあらわにしつつ、進行していった。

(つづく)

(注1) 引用文については、かなづかいは原文

のままとし、漢字は当用漢字のみ新字体とした。以下、特にことわらない限り、この原則を踏襲した。

(注2) 当時の公文書では「教則」の語を使っている。

(注3) 平野次郎国臣(一八二四～六四)幕末の志士。福岡藩士で江戸勤務中ペリー来航に会い、のち長崎に勤務して尊王攘夷の思想を固め、脱藩して西国の尊攘派の結集を画策、また但馬生野での澤宣嘉の挙兵に参加したりしたが、のち京都で捕えられ、禁門の変にさいし獄中で斬殺された。

*叙述の都合で、部分的に敬称を略させていた
だいたところがあります。

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年 一月二十五日

印刷

平成元年 二月 一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

古今俳句の鑑賞

『採 芳 巡 礼』

島根大学名誉教授

伊 澤 元 美 著

◎「俳句」とは何か——芭蕉から山頭火まで、縦横に俳句史の世界を巡りつづけて五十有余年、近代文学研究の手法での批評活動の基底にある想いを江戸から現代の俳人たちの名句を通して語る。俳句の一語一音の意味と形式を優しく、そして鋭く解き明かしてくれる。

B 6 判 一六七ページ 定価二〇〇〇円

△発行・発売▽ キ ュ ー ブ 社

〒162 東京都新宿区市谷本村町二—三三—二〇一

振替(東京)四—三六五六三— 電話(〇三)二六八一—八六七

第五十五卷

二月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成元年一月二十五日印刷 平成元年二月一日発行